

月刊ニューズレター

現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第39号 2018年3月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 富岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP(最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム 『宗教と教育に関する学説及実際』における 非宗教者から見た宗教と教育のあり方	雨宮 和輝	2
逸話と世評で綴る女子教育史(39) －米国メソジスト婦人外国伝導局－	神辺 靖光	5
東京帝国大学医学部卒業を控えて、医学生はなにを想う －『なあべる』第4号(1940年3月)から－	谷本 宗生	8
近代日本における大学予備教育の研究(32) －大学予科の学科課程 同志社大学③－	山本 剛	10
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道(38) 学校沿革史にみる補習科・専攻科(34):岡山県(7)	吉野 剛弘	13
教育における自治(8) 石田雄『自治』を読む(7)	富岡 勝	16
刊行要項(2015年6月15日現在)		18
短評・文献紹介		19
会員消息		21

コラム
『宗教と教育に関する学説及
実際』における非宗教者から
見た宗教と教育のあり方

あめみや かずき
雨宮 和輝
(早稲田大学)

筆者はこれまでニューズレターにおいて大正期の私学の大学昇格以前と以後において、宗教系私学が大学昇格する際にどのような教育方針を形成し、また学部・学科組織及び学科課程にいかなる変化があったのかを分析し

てきた。ただ、筆者は教育方針に関して、仏教、キリスト教宗派の関係者の言説に焦点を当て、分析してきた。では、大正期に仏教、キリスト教の宗派関係者以外の教育者、つまり、非宗教的な教育者は、宗教と教育の関係に関してどのような考えを持っていたのだろうか。本稿においては『宗教と教育に関する学説及実際』(1913年、大谷大学尋源会)に掲載された非宗教的な立場の教育者の言説を中心に分析し、大正期において非宗教的な教育者から宗教と教育の関係はどのように捉えられており、いかなる宗教教育が求められていたのかを考えたい。

では、本稿で取り上げる『宗教と教育に関する言説及実際』とはどのような史料であるのか。発行は大谷大学尋源会となっており、大谷大学関係の組織から出版されたとわかる。また、尋源会の会長で、大谷派の教学部長も務めた大谷瑩亮は「本大学の移転を記念すべき本書」と述べている。つまり、同書は以前、筆者がニューズレター記事でも取り扱った1913年の真宗大谷大学が京都に移転した際に出版されたものであることがわかる。同書には多くの教育関係者が言説を寄せているが、本稿ではそれらの中でも、早稲田大学総長であった高田早苗と、日本女子大学校学長であった成瀬仁蔵の言説に焦点を当て、非宗教的な立場の教育者が、教育と宗教の関係にどのような考えを持っていたのかを分析する。

まず、早稲田大学学長の高田早苗は「人格の基礎としての宗教と教育及一般特殊宗教学校」という題で言説を述べており、宗教と教育を混同することを問題視しているが、宗教学校のあり方に関しては以下のように述べてい

る。

世間に特殊なる宗教学校なるものがあつて、その信ずるところの教理を基礎として教育を施し若しくはその宗旨を喧傳するところの人物を養成するといふ事は全く別問題であると同時に極めて必要なる事業である。かくの如きものが盛んになつて初めて宗教が時代の要求に應ずるやうに改善されるのである。各宗の教義はもとより古いものである。又古いのが宜しいのであるが古いテキストに新しい解釈を加へて初めて時代相應の宗教となるのである。如何なる貴いところの宗教も少くともその解釈の上に於て新しき色彩を帯び時世に相應する解釈、時代に相慶せる喧傳の方法をとらなければ到底ながく命脈を保つ事は出来まいと思ふ、而して世間の所謂宗教学校なるものはこの事業に應當する人材を養成する場處であるから、社会に宗教が必要ならざる限り又知識のみを以て人間萬般のことを釈解せざる限りはかかる学校の隆盛に赴くといふ事は最も望ましき事であるといはなければならぬ

高田が述べているのは、宗教学校での宗教教育は時代に相応なものである必要があると述べており、学校としても時代に合わせた宣伝をしなければ、存続は難しいと述べている。この高田の言説は、当時の宗派関係者も持ち合わせていた、時代に則した宗教教育を行うべきとする考えと共通している。つまり、高田のこの言説からは、非宗教的な人間から見ても、大正期に入ってから宗教教育は、時代が要請する形に変化する必要に迫られていた見ることができる。

次に、日本女子大学創立者で、当時日本女子大学校長であつた成瀬仁蔵の「宗教と教育の関係」という言説に着目したい。成瀬はプロテスタントであるため、完全な非宗教的な教育者とは言えない。ただ、成瀬も高田と同様に宗教を一般的な学校において教育することは難しいという考えを表明している。その一方で成瀬は以下のように述べている。

宗教は教育の根本である、又教育の動力であるから、此の動力を養ふと云ふことが教育の主眼でなくてはならぬ。其の意味から自分は教育と宗教とは非常に関係がある、従つて又互に相援けて行かなければならぬと思ふ。又教育家が宗教を毛嫌ひするとか、寺や神社に参詣するのを妨げると云ふやうなことも、甚だ宜しくないことと思ふ(筆者＝中略)それから女子大学も其の主義でやつて居るのである。それであるから女子大学には仏教の人も居れば、耶蘇教の人も居り、神道の人も居る、様々の人が居るけれども、其間に少しも衝突は起らぬ。学校では宗教のことは生徒の自由にして居るが、少しも差支えは起らぬ。そこまで行かなくては本当の教育は出来ないのである

成瀬は自身が学長である日本女子大学校の例を取り上げ、女子大学での宗教は自由であると述べている。プロテスタントである成瀬が女子大学で宗教の信仰の自由を認めているのは、興味深い点として見ることができる。このように、非宗教的な教育者は一般的な学校で宗教教育を行うことは難しいとしながらも、宗教と教育は密接な関係にあるものと捉えていたのである。

以上、『宗教と教育に関する学説及実際』に掲載された全ての教育者の言説を取り上げることはできなかつたが、非宗教的な私学の学校関係者が、教育と宗教のあり方に関してどのような考えを持っているかを分析した。今回は二人であつたが、大正期には、非宗教的な立場であっても、多数の教育者が教育と宗教のあり方に関する言説を述べている。今後は、宗教系私学の宗教教育を、宗門、あるいは宗派外の間人がどのような教育として捉えていたのかを明確するために、非宗教的な立場の教育者の、宗教教育に関する言説にも着目していきたい。

***このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしております。**

逸話と世評で綴る女子教育史(39)

—米国メソジスト婦人外国伝導局—

かんべ やすみつ
神辺 靖光(ニューズレター同人)

スクーンメーカーを日本に派遣し、海岸女学校を全面的に支援したのは米国のメソジスト監督教会婦人外国伝導局 The Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church(略称 W・F・M・S)である。

1869(明治2)年、マサチューセッツ州のボストンにあるメソジスト宣教師館で3人の夫人が近代化の遅れた東洋の女性のために伝道基金を設けようと発議したのがこの発端である。3人の夫人とはメソジスト監督教会の婦人慈善協会会長のフランダース夫人、インドから帰国したばかりのパーカー夫人、異教徒の間で長く暮らした経験を持つバトラー夫人である。インドや東南アジアのカースト制や封建的家族制度の下で虐げられた女性を見てきたので、これを救うことに正義の情熱を燃やしたのである。南北戦争が終結したばかりのこの頃のアメリカ有産階級の夫人たちは、あわれな未開国の女性を救わねばならぬ。それにはわれわれが信ずるキリスト教を通してわがアメリカの文明をかの地にもたらさなくてはならぬとする高揚した気持ちがあった。よって3夫人の提案に賛同する者が多く、ここに同教会の婦人外国伝道局が発足した。この趣旨に賛同した会員は年1ドルを払い込まねばならぬ。終身会員は年20ドル、100ドル納めれば終身名誉会員に、300ドル納めれば終身名誉賛助会員の資格を得られる。前々回述べたようにスクンメーカーが来日したのは同局に1,000ドルを寄付した夫人があったからである。同局の会員は短期間に増加し、はじめ東部ばかりであった支部も次第に西部から太

平洋沿岸に及んだ。布教の目標は、はじめインド、中国であったが、日本の情報も多く入りはじめた頃で、日本も主要目標国になった。海岸女学校が焼失した1879年から翌年にかけて、同校のために7,161ドル、新校舎が落成してアトキンソン校長以下新任教員が来るようになった84年、7,845ドル、以後年々増額されて、同校が活況を呈した87年には1万7,445ドルが支給された。これとは別に日本の伝道費として84年、2万1178ドル、以後、年々増額されて、89年には5万0,895ドルが送金された。一人の宣教師の年俸は約600ドルであるから伝導局が送ってくる金額はそればかりに使われるのではなかった。

W・F・M・Sの活動方針は大別して二つあった。一つはバイブルウーマン女子宣教師の養成であり、一つは女学校の経営である。W・F・M・Sのバイブルウーマンの養成研修はメソジスト・エписコパルの名の通り厳格厳正で組織的かつ監督の行きとどいたものであった。後には横浜と長崎に伝道師養成学校が設けられるが、この頃は、日曜学校やバイブルクラスで、集ってくる子どもや男女青年にバイブルを教え、洗礼を受けるように導き、伝道師の助手がつかまるようにする。その外に日程を決めて伝道旅行にでかけた。例えば前出のスパンサーは85年に北関東、86年に名古屋をふり出しに三河と南信を日本人助手のバイブルウーマンと巡っているが、村から村へ、家から家へ尋ね廻るきびしい旅であった。これまで邪教とみられていた耶蘇教^{ヤソ}を布教するのだから門前払いをくわされたこともあっただろう。それに耐えての伝道旅行であるが、この時、スパンサーはマジックランタン(幻燈機)と小型オルガン(アコーディオンか?)を持ち歩いた。幻燈機で都会や外国の風景を写すと面白がって人々が集り、小型オルガンで讚美歌やアメリカの唄を歌った。こうして伝道の旅は少しずつ成果をあげていったのである。この頃のアメリカ人の

伝道には開化の遅れた東洋人にアメリカの進んだ文明を教えてやるという高慢な側面があったが、その国の文化を重んじ習慣を覚えようとする側面もあった。とりわけ開拓を経験したアメリカ女性の宣教師にはこうした面での強い意思があった。スクーンメーカーもいち早く日本語を覚えたというし、後続の婦人宣教師たちも片言ながら日本語を喋った。彼女たちが伝道旅行をする際には、ある研究が課された。それはその地方の伝統的習慣を学ぶことで、これが将来の伝道により結果をもたらすと考えられたからである。アメリカ伝道局の女性はこうして鍛えられ、伝道に邁進する。日本娘の伝道助手も次第にふえ、折からのリヴァイヴル運動(後に述べる)と相まって1880年代、キリスト教プロテスタントは空前の活況を呈したのである。

M・F・M・Sの第二の使命は女学校をたてることであった。スクーンメーカーの救世学校を皮切りにM・F・M・Sがつくった学校で今に残るのは青山学院のほかに1879年創立の長崎活水女学校(現活水学院)、1881年創立の函館・遺愛女学校(現遺愛女子学校)であるが、当時は、このほかに弘前女学校、清流女学校(名古屋)があつて、日本列島の北から西南にかけての要地に同派の女学校が点在したのであった。各学校にスカラシップ(奨学金)があつて奨学生の中から邦人伝道師が生まれるようになっていた。

参考文献『青山女学院史』

基督教学校教育同盟『日本におけるキリスト教学校教育の現状』

日本教育科学研究所『近代日本の私学』

東京帝国大学医学部卒業を控えて、医学生はなにを想う

—『なあべる』第4号(1940年3月)から—

たにもと むねお

谷本 宗生(大東文化大学)

今回は、ニューズレター第29号(2017年5月)でも取り上げた東京帝国大学医学部昭和十一年会雑誌部『なあべる』の最終号である第4号(1940年3月)から、東京帝国大学医学部卒業を控えて、医学生らがなにを想ってそれを綴っているかを、数名の文章を挙げて紹介したいと思う。

田中芳男(伝染病研究所への勤務志望)は、「私達も愈々卒業する事になった」のなかで、「学生生活ももう直ぐ終りを告げる。長い間の習慣で何だかしかし外へ放り出される迄はピンと来ない。学校を出ても未だ親の脛をかじらねばならないとしても外来診療やクリニックで牛耳られる代りに、背広を着て、いはゆる複雑怪奇な世の中へ泳ぎ出す以上、学生々活はここに亡びねばなるまい。『学生が一番のんきでよい御身分だ』といふ声を随分聞きなれて来た。しかしその通りをうなづけないにしても、浮世の風が荒れる外から、さながら無風状態の講堂の中をのぞき込んだら如何にもさう見えるのかも知れぬ。さて、此の長い生活で、一体何がなされたのだらう。学生の名の示す様に、一つの専門的な常識を身につける為には、あまりにも土台にうづもれる知識の多いのに少なからず当てられた形だ。しかし、そんな事をしてゐる間にも最も著しい現象が起つた。それはこんな一人の人間が出来上つたといふ事だ。ある型が出来上つたのである。その型に従つて友を選び、愛を求める外どうする事も出来ない自分の姿に時に、フト気がつくといふ一寸奇異な感じがしないでもない。こんなのが恐らく社会へのり出した時の、その人となりとなるのだらう。学生の生活は直接に生きてゆく事とは少しはなれてゐるので、世の中から見れば、放逸な附随的なものに見える様であるが、その生活をチツと見詰めてみると、すすくと唯のびてゐる若い芽の様な気やすさ、広野をわたるそよ風の様な自由さを見逃す事が出来ない。人は、生きてゆかねばならないといふことを意識せずに生きてゐる事は何といふ楽しい事だらう。…学生時代に経験してゆくいくつかのものは、全く苦しみといふものを前提としてのみ考へら

れる様な喜び以上の思ひ出だ。そのたまらなくなつかしい、或は渋味のある余韻を耳に感じながら、このたそがれゆく学生生活の中を歩いてゆく」と、率直に自分の想いを記している。

また石原弘道(院内大槻外科への勤務志望)は、「下宿」と題して、「この『なあべる』に筆をとるのは小生にとっては最初にして最後である。…改つて何か書くとなると何もない。仕方が無いから、下宿の事を書く事にした。一年から三年の六月迄放縦な生活を渋谷に過し、或事情から高円寺のアパートに移つた。ここでも余り愉快的な生活では無かつた。一人ぼつちの住居なんてとても耐へられなかつたので、昨秋今の下井草の下宿に引越した。此処には物を商ふ店が非常に少く、八百屋、魚屋、ソバ屋、雑貨店の他には目ぼしい店は見当らない。第一銭湯が無い。自体戸数が少い。下宿から一寸で、直ぐゆるやかな起伏のある武蔵野に出られる。野原を散策すると、何かぐつと強いものが感じられ、享樂的な都心のネオンは何か縁遠いものの様に思はれた。今年の夏は、ひまにまかせて、近所を大分歩いた。今、虫の音を聞きながら、目を閉ると、あそこの畑、あの森、あの沼地、が日一日と秋らしくなり、今はもう枯葉が大分地面に溜つてゐるのが浮んで来る。先頃迄はいも畑であつたのが、そこに大根が播かれ、既に腕位の太さになつて、真白い素肌を一二寸土から出してゐるのも見られる。子供達も良く田圃道で遊んでゐる。先頃などは、イナゴやキリギリス、カミキリ虫の角力をやらせてみた。…子供の頃を思ひ出してほほえましかつた。夜には天気が好いと、空が実にきれいだ。星座もお陰で大分覚えた。北斗七星からオリオン、カシオペア、蛇座、諸遊星…。いつも日が暮れてから帰る時には、空を仰いで、あれは何、これは何、水星は今日は大分偏つてゐるな、火星は随分小さくなつたな等と、独り合点で駅から数分の道程が実に短い。さて、中秋の駄作を述べて漫筆を終る事にする。『むさしのの 虫の音さみし 月青し』と、学生時代の下宿生活の幸せな時間を振り返っている。しかし時は、まさに日中戦争も継続していくなかで、戦局の影響も大学の教育・研究活動に大きく及んでいくのであろう。

近代日本における大学予備教育の研究(32)

—大学予科の学科課程 同志社大学③—

やまもと たけし
山本 剛(早稲田大学)

はじめに

しばらく本レターを休んでしまった。今月号から執筆を再開したい。

第31号(2017年7月15日)では、1920(大正9)年に設立認可された同志社大学において、同大学設立時に大学予科の学科課程にキリスト教系の学科目を配置すべきである、とする意見が出されていたことを確認した。それは宗教関係の学科目を置かなければ、「大学」昇格によって同校の宗教的な「精神教育の色彩」が「稀薄」になるのではないかと危惧するものに他ならなかった¹。

他方、同校はキリスト教主義大学としての設立認可に際して、大学令第一条「国家思想ノ涵養」に抵触するのではないかと、という疑念が抱かれた²。

1920(大正9)年の『同志社時報』では³、設立認可の審査過程で「国家思想の涵養」と「基督教主義」の撞着について、「先づ文部当局が之に疑を抱き、その諮問機関たる教育委員会に於ては二三の頑強なる基督教主義大学の反対論」があり、「枢密院方面にも異論起り、帝国大学にも不賛成者」があったことが報告されている。

いずれにせよ、「幸いにして与論と国際の趨勢は、時代錯誤の謬想を撃破して」、「幾多の論議と交渉の波瀾はあつたが」、同大学は「神学の研究を認め」られて「徳育上基督教主義を是認」されたのであった。

さて、繰り返し述べるように、「大学」昇格は、法令上の規定に従うことであり、キリスト教を専門としない学生が入学することで、同校の建学の理念・教育理念が「稀薄」になることを危惧するものであった。先の大学予科の段階

で宗教関係の学科目の配置を望む意見は、宗教系大学として、どのように予科の生徒を教育していくべきかを問うものであったと言えよう。

それでは、同大学予科設立時の学科課程はどのようなものであったのだろうか。

表 同志社大学予科の学科課程

課目	毎週授業時間		
	一年	二年	三年
修身	1	1	1
国語・漢文	4	4	3
第一外国語 (英)	10	10	9
第二外国語 (独又仏)	4	4	4
歴史	3	4	3
地理	2		
哲学概論			3
心理・論理		2	2
法制・経済			4
数学	3		
自然科学	2	2	
体操	2	2	
計	31	29	29

1 大学予科の学科課程編成

既述したように、同志社大学は設立時に三年制の大学予科を設置した。学科課程は左の通りである⁴。

同志社大学予科の学科課程は、高等学校高等科文科のそれと比較すると、学年配当の毎週授業時間数で、「国語・漢文」、「歴史」および「体操」がやや少ないことを除いて、科目名称・教科の配列順序が同じである。ただし、同大学予科では、英語の毎週授業時間数が高等学校に比べて多い。また、高等学校規程では第二外国語は随意科目であったが、

同大学予科では、第一外国語を英語に限定して、第二外国語は独語または仏語のいずれかを選択した⁵。

このように、同大学予科の学科課程は、たしかに「英語」を重視するものであったが、高等学校規程にほぼ準じて定められており、先の宗教関係の学科目を配置するようなことはなかった。

このことは後に検討するキリスト教主義大学の関西学院大学予科が「修身」とは別に「基督教概説」を配置していたことと対照的であった⁶。あくまで

も同志社大学予科の学科課程は法令上の規定に従うものであったと言えよう。

こうしたなかで同志社大学予科では、実際にどのように宗教に関する教育を行ったのだろうか、次回で検討しよう。

- 1 総長海老名弾正「新年の感」『同志社時報』(1925年2月)、第227号。
- 2 『同志社百年史』通史編1(1979年、同志社)、835頁。
- 3 高木庄太郎「同志社大学と基督教主義」『同志社時報』(1920年6月)、第176号。
- 4 『同志社一覽 自大正十年至大正十一年』(1921年、同志社)。
- 5 前掲『同志社百年史』、837頁。
- 6 『関西学院百年史』通史編 I (1997年、関西学院)、482頁。

新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道(38)

学校沿革史にみる補習科・専攻科(34):岡山県(7)

よしの たけひろ
吉野 剛弘(東京電機大学)

今号では、補習科の年間スケジュールを検討した上で、前号までに明らかにしたことをふまえて、岡山県の補習科に関してこれまでに検討したことを整理した上で、今後の展望を示していく。

岡山一宮高等学校の沿革史では、創設年度である1983(昭和58)年度の年間行事が示されている。

- 4月4、5日 補習科受付
- 11日 補習科開講式
- 19日 補習科5校戦打ち合せ会
- 26、27日 実力考査①
- 5月11日 5校戦
- 26日 旺文社模試
- 6月11、12日 進研模試
- 7月9日 前期閉講式
- 11～13日 保護者会
- 18、19日 進路模試
- 9月1日 後期開講式
- 2、3日 実力考査②
- 23日 代々木模試
- 10月29、30日 進研・全統模試
- 11月8、9日 実力考査③
- 13日 岡大・全統模試
- 26～29日 補習科進路検討会

12月3日 駿台模試
14日 後期閉講式
15～19日 保護者会
27、28日 共通一次直前演習
1月14、15日 共通一次学力試験
3月4日 国公立大2次試験

(岡山一宮高等学校編集委員会編『創立二十年史』(岡山県立岡山一宮高等学校,1999),p.109)

「5校戦」というものが見えるが、これは本科でも実施されているものである。岡山市内の普通科高校の交流戦なのだが、岡山一宮高等学校にも補習科ができたことで、全校に補習科があることになるので、補習科でも開催したということであろう。

ここで注目したいのは、校外の模擬試験の実施状況である。5月の旺文社模試を皮切りに、5つの機関の模擬試験を実施している。予備校系のものは、駿台、代々木、河合塾(全統模試)であり、出版社系のは、旺文社、進研である。

大学入試には情報戦という側面がある。殊に共通一次試験の実施以降はその側面が非常に強くなっている。ここまで多くの校外模試を使えば、学力の把握のみならず進路選択にも資することになる。

しかも、予備校で浪人生活を送る者が他社の模擬試験を受けることは、必ずしも多くない。たくさん受ければよいというものではないのだが、このような体制がある種の安心感を生んだということは、十分に考えられることである。

これまで検討してきた点をふまえて、今後の展望を示しておく。

岡山県では、新制高等学校発足の初期から、旧制の学校の母体とするところに補習科が設置されはじめた。その後、岡山市内で普通科高等学校が増設されていくが、そのたびに補習科が設置されていくことになった。補習科が市民権を得たと評することもできるが、岡山県で補習科がこのように設置

されていくのは、岡山市内の学校にとどまる。これは他県とは大きく異なる特徴である(宮崎県も同様のことが言えそうなのだが)。補習科設置政策の検討が必要である。

その補習科の教育課程は、明らかに国公立大学志望者にシフトしたものだ。都市部とは異なり、国公立志向が強いことは事実だろうが、私立大学志望者にはいささか酷な教育課程である。しかも、1990(平成2)年に私立大学文系志望者に人気を博した代々木ゼミナールが進出していることを考えれば、なおのことである。

しかし、そのような教育課程であり、三大予備校の進出がありながらも、補習科の生徒数は安定した推移を見せた。その要因を検討する必要があるだろう。

要因の一つとして、環境変化への忌避という心的な側面というものを前号で指摘したが、この点は岡山県に限った話ではない。今号で示した模擬試験の実施状況など、多角的な検討を要することは言うまでもない。

これらの諸課題の検討は、他日に期すことにしたい。

教育における自治(8) 石田雄『自治』を読む(7)

とみおか まさる
富岡 勝(近畿大学)

この連載記事を書くのが久しぶりになってしまった。

第32号～第34号では、明治20年代の憲法体制期に打ち出された自治観である「地方自治」について石田雄『自治』を通して検討し、第36号では石田雄『日本の政治と言葉 上 「自由と福祉」』における「自由」という語の分析(日本におけるフランス型「自由」の摂取についての問題点)を紹介した。

本号では、石田雄『自治』の「都市自治の登場と『自治公民』大正デモクラシー期」と題した章で取り上げられている、大正期に登場した新たな意味の「自治」について紹介したい。

「19世紀から20世紀への転換の頃から、東京などの大都会を中心に急速に進行した都市化の傾向は、明治憲法体制下の「地方自治」制の予想しない事態を生み出した¹⁾という。つまり、急速な都市化のなかで「都市下層社会」とよばれる部分においては、「社会問題」を発生させやすい不安定さがみられるようになったが、こうした不安定な階層については、農村の場合のように伝統的共同体の再編によって上からの「自治制」に組み込むことは容易に期待できないという事態になってしまったと石田は述べる。

このようななか、都市住民の「自治」を論じた片山潜の『都市社会主義』(1903年刊)、大杉栄の「自由自治社会」構想の提唱(1915年)などが見られるようになった。石田は、片山や大杉の「自治」論が当時の日本社会で農村を含めて広範に実現される可能性は乏しいとしながらも、「自治」の新しい基礎となりうる諸団体の多元的発生という現象が、大正期には「否定できない歴史的条件をなしていた」とする。

この諸団体の多元的発生という歴史的条件を前提とした新たな「自治」

論の代表として石田が紹介する織田萬の「自治の本義」(1918年)では、「自治」について次のように述べられている。

自治とは読んで字の如く人民自ら治むるの義にして、即ち治者たる政府の手を仮らずして被治者たる人民が自ら進んで政治に当ることを謂ふ、故に汎く自治と云ふときは独り地方自治に限らず、各種の事項に付いて自治が行はれ得る、商工会議所、農会、水利組合、耕地整理組合、同業組合等は皆地方自治体以外の自治を為すものであつて、我邦にも現に此等の制度が認められて居る、又広義の自治は必ずしも行政上の事に限らず、立法上、司法上も均しく存し得る、人民の代表者が国会に列して立法事業に参与するは立法上の自治であり、陪審員が民間より選ばれて裁判所の判決に陪席するは司法上の自治である²。

ここでは「自治」は、地方自治体以外の団体が行うものも含まれること、行政の意味に限定されず、立法上(選挙による人民代表者の立法への参与)、司法上(民間からの陪審員の選出)においても認められると述べられている。これは、自由民権運動期の「自治=自由」論とも、地方名望家層などによる国家を支える「地方自治」とも異なり、たしかに、新しい意味での「自治」であったといえるだろう。

こうした大正期の「自治」論の変化は、旧制高校や旧制大学の学生が担った「自治」とは何か関係があったのだろうか。例えば、一高の寄宿舎自治が新渡戸稲造校長の登場によって変化しはじめたというストーリーがあるが、こうした石田のいう大正期ごろの新しい「自治」の登場とどのように関係があったのかなかったのか実証を通じて検討できたらと思う。

1 石田雄『自治』三省堂、1998年、20頁。

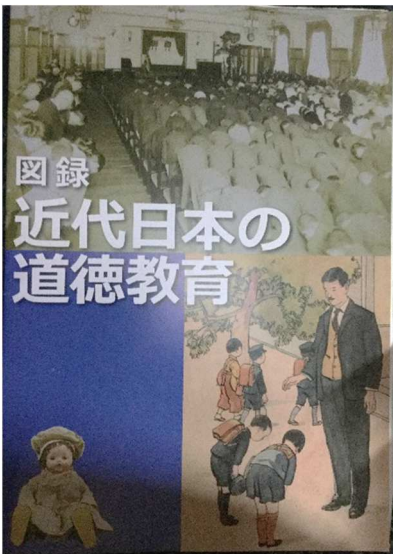
2 同前掲書、42頁。

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項(2015年6月15日現在)

- 1.(目的)広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
- 2.(記事のテーマ)記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
- 3.(刊行頻度・期間)研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
- 4.(編集委員会・編集世話人)発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
- 5.(執筆者)執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
- 6.(記事の責任)記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
- 7.(記事の種類・分量)記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
- 8.毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
- 9.ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
- 10.ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
- 11.以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

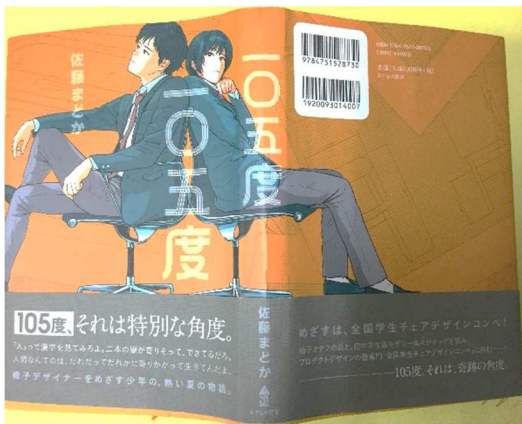
以上

樺山紘一さん(東京大学名誉教授)が、対談のなかで「東京大学は一定の歴史的条件のなかで、しかも東京という特異な空間的条件のなかでもってできあがったものですから、その二つの側面を具体的に考えてみたいと思った。それを通して大学と都市というのは本質的にどういう関係であるべきか?というような議論も含めて考える必要があるだろう」(『東京大学が文京区になかったら』2018年、48頁)と述べています。さあ大学史研究者ら、皆さんの出番ですね。(谷本)



京都市学校歴史博物館学芸員の和崎光太郎著『図録 近代日本の道徳教育』(京都市学校歴史博物館、2018年2月24日)は、同館の企画展「近代日本の道徳教育」(開催期間2017年12月16日～2018年4月15日)の展示内容をカラー写真と詳細な解説&コラムで73頁にわたって紹介したものである。「本書では、史料の表面的な解説だけではなく、史料に関する先行研究で実証されているにもかかわらずあまり広く知られていない史実を、読者の「深い学び」に貢献するために意図的に多く書きました」(同書、2頁)と著者が述べているように、図録でありながら近代日本の道徳教育の一種の通史を目指した意欲作である。評者は展示と本書の両方から、「史料による実証とともにモノ・コトに注目した佐藤秀夫」と共通したものを感じた。職場に見本を1冊置いたところ、勤務先の同僚複数からも「購入したい」という声を受けたので、同館に問い合わせさせて注文した。展示を見た人にも見

ていない人にも楽しめるのではないだろうか。内容の充実ぶりに反して価格がわずかに500円ということもあり、残部わずかのようなのである。再版を期待したい。(富岡)



最近ふと、「つつい立派なものを書こうと格好つけてしまっているところがあるので、研究がなかなか進まないのではないか」と思うようになった。研究以外で好きなこと、関心のあることともしっかり結びつけたら、「ホンネに近い研究として、どんどん書けるようになるの

ではないか」と考えたので、この本を紹介したい。佐藤まどか『一〇五度』あすなろ書房、2017年、1400円+税)である。「105度」と突然いわれても何のことだ分からないが、表紙と帯がヒントになっているように、主人公がつくろうとしている椅子の角度のことである。また、佐藤まどかの書いた本は以前から楽しんでいたので中身を読む前に購入した。佐藤氏は、イタリアでプロダクトデザイナーとして活躍するとともに、『マジックアウト』三部作や『カフェ・デ・キリコ』『水色の足ひれ』などの児童文学の世界でも活躍している。本書『一〇五度』は、椅子作りに情熱を燃やす中学生の主人公が、椅子づくりを通して人と出会い、さらに深い学びのために大学進学も志すというもので、自作ノート開発などの「ものづくり」に興味をもつ評者は、強く共感した。評者の今年のテーマは、「ものづくり」好きを活かした論文書きの方法を編み出すことである。(富岡)

会員消息

日本のアニメーションは百周年を迎え、今やクールジャパン戦略の一環としても位置付けられて久しい状況である。アニメ作品などについてもまた、研究上の対象(研究のテキスト)として、真摯に我われも捉えてみる必要があるだろう。さてライトノベルを原作としてアニメ化された人気作品の1つ、「魔弾の王と戦姫」(2014年アニメ化)の第9話「雷渦と煌炎」で、戦姫軍の副官@裏方をつとめるリムアリーシャが、自身の覚悟をあらためて問われて返答するシーン。「非才なる身の全力を以て」と答えたひと言は、寡黙で実直な彼女の責任感がよく溢れているだろう。多言をもってするより、素直な思いが伝わる。(谷本)

個人的な話で恐縮ですが、このたび勤務先の任期が満了しました。派遣、契約、任期…?「大学」が(も)崩壊していく現状を実感しております。さて、京大や阪大の入試ミスに関して、興味深い記事がありました。…昔はほとんどの大学に教養課程があり、そこには「入試の神様」みたいな先生がいた。高校の教科に隔々まで精通し、「高校物理」という方言を自由自在に話せた人たちである。もし彼らがチェックしていれば、阪大や京大の音波の問題も、大学入試として適切か否かを事前に判定できたのではないかとも思う。だが、高校と大学の学びをつなぐ入試の神様たちの居場所が、今の国立大学にはない。2004年の国立大学法人化以後、教員1人ずつの研究業績が厳しく評価されるようになったからだ。入試の神様たちは、学術研究の業績はあまり多くない…(佐倉統氏「入試出題の『技』評価対象に」『読売新聞』論点2018年3月15日)「大学」とはなにか、本レターで問い続けていきたいです。(山本 剛)

3月に勤務校の新しい展示施設が開館したため、その準備に追われて年度内は休みがほとんど取れませんでした。そこで年度末に有給休暇をとって、福岡と北海道に取材旅行(?)をしてきました。その成果は次号以降で公表したいと思いますので、今しばらくお待ちくださいませ。(田中智子)

「短評・文献紹介」に書きましたように、今年は「ものづくり」好きを活かした論文書きの方法を編み出したいです。もう一つ、(やり方次第では)「忙しいからこそ書ける」という仮説を検証してみたいです。(富岡)

いつの間にやら歳を取ったためか、それとも意外と文章が好評なためか、はたまた他に人が居ないだけなのか、このところ書評の依頼が毎年のように舞い込みます。これも学界への貢献と思い、よほどの事情がない限り断りませんが、読むのは楽しい反面、書くのは本当に大変です。

つい先日、和崎光太郎さんの著書『明治の〈青年〉』について書評を書きました。リンクをつけておきますので良かったらご覧下さい。

小宮山道夫「和崎光太郎『明治の〈青年〉』」(京都大学大学院人間・環境学研究科『人環フォーラム』No. 36、2018年2月、45頁)

<https://repository.kulib.kyoto-ac.jp/dspace/bitstream/2433/229520/1/jkf036.pdf>

また、現在は某氏が最近纏められた学術書の書評を『地方教育史研究』に載せるべく取り組んでいます。これまた楽しく且つ辛い日々です。(小宮山)

本ニュースレターPDFファイルをダウンロードして印刷される際、**Adobe Reader** などのソフトの「小冊子印刷」機能を利用して **A4** サイズ両面刷りに設定すれば **A5** サイズの小冊子ができます。

